

仲間とともに

娘は小学3年生からソフトボールを始め、中学校時代にはキャプテンを務めるなど、チームの中心的な存在として活躍していました。

「今日なあ、部活でこんなことがあったんよお。」

と、いつも生き生きと部活動の話聞かせてくれました。

私は、娘のがんばる姿を見るのが楽しみで、試合があるたびに会場に行き、一喜一憂しながら応援していました。

進学した高校には、残念ながらソフトボール部がありませんでした。娘は、いろいろな部活動動を見学した結果、

「私、剣道部に入りたい。厳しそうやけど、がんばってみる。」

と、練習が厳しいことで評判の剣道部に入部しました。

予想どおり、初心者の娘はついていくのが精一杯のようでしたが、私は、

「自分で決めたことなんやから、最後までがんばらなあかんで。」

と、時には厳しい声をかけ、励ましたこともありました。

しかし、2年生になった頃から、朝学校へ行く時間が近づくと不調を訴えるようになり、夏休み前には、学校を連続して休みました。ソフトボールをがんばる娘の姿が強く目に焼きついている私には、学校に行けなくなった娘の姿を受け入れることができませんでした。

数日後、朝から顔色はさえませんでしたが、なんとか登校することができました。仕事を終えて家に帰ると、意外にも娘はすっきりとした表情をして、学校であったことを話し始めました。

「朝学校へ行ったら、部活のみんなが集まってきて、真剣な顔して『ずっと様子がおかしかったから心配してたんやで』って言ってくれた。」

その後、娘は少し考えてから話を続けました。

「私な。練習がしんどくて、ついていけへん時があるんや。がんばらなあかんと思うけど…苦しくて、情けなくて、泣けてくるんや。みんなに迷惑かけるし、どんどん差がつくし…私って弱い人間やなって思う。」

娘は目に涙を浮かべながら、さらに続けました。

「こんなことを家でも言ったことがなかったし、誰にも話すつもりはなかったけど、みんなの真剣な顔を見てたら、話してしもたんや。そしたら、みんな、『うん、うん』って、最後まで 聴いてくれた。そして、『私もそんな時あるで』って、自分のしんどいことを、いろいろ話してくれたんや。」

「話してるうちに、私はひとりじゃないんやって思えて、力が湧いてきたわ。仲間といっしょに、これからは私なりにやってみる。」

と、吹っ切れたように話しました。

このとき、私は初めて娘の心の声を聴いたような気がしました。娘は、今までしんどい思いを家で話すことはありませんでした。いや、話せなかったのかもしれませんが。ひょっとしたら私の期待に応えることへのプレッシャーがあったのかもしれませんが。私は、今までずっと娘を応援し、支えてきたつもりでした。しかし、娘が一番しんどい時に支えになってくれたのは、真剣に話を聴き、しんどさを分かち合ってくれた仲間たちでした。

この春、娘は高校3年生になり、今も仲間とともに剣道を続けています。まだまだ心が揺れ動くこともあると思いますが、娘の心の声に耳を傾け、娘のありのままを受けとめられる親でありたいと思っています。